愛知教育大学研究報告，56（人文・社会科学編），pp. 1 ～ 7 , March, 2007

郁達夫と孫荃・王映霞
――家・家族・愛の視点から――（中）

高橋みつる
Mitsuru TAKAHASHI

国語教育講座

4，王映霞との出会いから恋の成就まで

郁達夫が王映霞と初めて出会ったのは，1927年１月14日，上海に滞在していた同郷人の孫百剛を訪ねたときであった。郁達夫は一目で恋に落ち，熱烈な求愛の末結ばれるが，1940年協議離婚によって，12年間の結婚生活に終止符を打った。

彼らの生活に関しては，当事者自身の記録したものとして，郁達夫『日記九種』[49]『毀家詩紀』，王映霞「半生雑憶」『王映霞自伝』[50]があり，それぞれ結婚に至る経緯や当時の心情を克明に伝えている。しかし，郁達夫と王映霞の記述には，事実認識において矛盾や対立が各所に見られる。孫百剛『郁達夫与王映霞』[51]『郁達夫外伝』[52]は，二人の恋愛劇に立ち会った者として，比較的客観的な史料を提供し，二人の主張の食い違いについても自己の判断を示してはいるが，十全なものではない。

その後の研究や伝記類の記述にも，こうした状況が反映しており，筆者の見る限りどちらかと言えば，非業の死を遂げた郁達夫に同情的で，再婚して幸福な後半生を送った王映霞に対して厳しい目を向ける傾向があるように感じられる。

しかし，たとえ事実は一つであっても，立場や心境が異なれば，受け止め方，感じ方が違ってくるのは当然であり，王映霞には，彼女の立場としての切実なる思いと言い分があったはずである。

本章からは，少し視点を変えて，郁達夫と王映霞の結婚を，王映霞の立場，すなわち一人の女性，一人の主婦の立場から見直してみたいと思う。

周知の通り，王映霞は杭州の著名な読書人王二南の孫娘[53]として生まれ，浙江省立女子師範学校を卒業した才色兼備の新女性であった。温州の浙江省立第十中学附属幼稚園で教師をしていたが，北伐戦争の混乱を避けるため，第十中学の同僚であった孫百剛夫妻と共にこのとき上海に仮住まいしていた。

この家柄も教養も容貌も申し分のない20歳の王映霞に対して，郁達夫は，新進作家として文名を馳せてはいたものの，すでに30歳を過ぎていて妻子のいる身であった。常識からいえば，この二人の間に男女の結びつきを想定するのは難しいのであるが，『日記九種』に見られるように，郁達夫は会った瞬間から王映霞の魅力の虜となり，彼女の愛を勝ち取るために涙ぐましい努力をする。

では，一方の王映霞は郁達夫をどのように見ていたのであろうか。

初対面の印象を，彼女は「好感というよりは物珍しさ，愛慕というよりは敬服といった方がよく，ちょうど一人の読者が愛読書の作者に会ったようなものだった」[54]と語っている。その背景には，王映霞の読書体験がある。

彼女は，浙江省立女子師範学校時代に，北京大学出身の語文教師の影響で，当時流行していた新小説に触れている。そのような中で郁達夫の『沈淪』も読み，その「大胆な描写に対して，何となくこわいような恥ずかしいような気がした。」また，それらの多くの新しい書物を通して，「各作者の人物像に，ある種のイメージが生まれていた」とも述べている。

このように，郁達夫は，王映霞が学生時代に読んだ『沈淪』の作者，時代の寵児とも言える憧れの人気作家として，彼女の前に出現したのであった。

郁達夫は自分より10歳以上も年上で，父の世代に当たる孫百剛先生の友人である。従って，彼女は有名な作家と知り合いになれたことを単純に喜んだだけで，よもや自分が一家を成し大業を遂げた人間の心を動かしたとは，想像もしていなかった。郁達夫が日記の中でしばしば彼女の方にも気があるように書いていることに対しても，「私という人間は，天真爛漫で，よくしゃべりよく笑い，人見知りをしないので，そのことが郁達夫を誤解させたのでしょう」と否定している。

ところが，予期せぬ郁達夫の恋情とその後の執拗な求愛，さらにそれに伴う周囲の反応との狭間で，王映霞はとまどい苦悩することとなる。

旧暦の年末に当たる１月25日に，王映霞は上海を離れ故郷の杭州に向かうが，帰省の目的のひとつは，郁達夫の熱情を冷まさせるために，彼の前から身を隠すことであった。若く純真で社会経験の乏しい王映霞には，突如巻き込まれた恋愛騒動は余りにも重荷で，目前の願いは，平穏な日常生活を取り戻すことにあったのであろう。少なくとも，この時点では，王映霞には郁達夫に対する恋愛感情，まして結婚の対象としての関心は微塵もなかったことは確かなようである。

彼女の心に微妙な変化を生じさせたのは，郁達夫から送られた何通もの情熱的な手紙であった。王映霞は，杭州で受け取った最初の手紙を読んだときの心境を，「杭州に帰ってきてから平静だった心は，この手紙によってかき乱された。手紙は感動的で，人情味もあるようだった」と記している。彼女は迷いに迷った末，「礼儀」として返事を出すことにした。これ以降，王映霞と上海の郁達夫との間で，手紙が頻繁に交わされるようになる。

王映霞は，『王映霞自伝』において，この時期の郁達夫の手紙と日記の記述を丹念に検証しながら，彼の心の軌跡をたどり，同時に自己の心理をも分析している。それによれば，冷淡な態度をとることで自然に恋情が薄らいでいくことを期待してみたり，一方で友人関係のままでいることを夢想してみたりと，次々と手元に届く手紙を前に，激しく揺れ動いていることがわかる。

動揺と迷いの中で，王映霞が一歩郁達夫に近づいたのが，２月25日の上海での再会であった。王映霞は，この上海行を，達夫が杭州に来るのを防ぐためであったと述べているが，許鳳才は，この行動は「愛の表明」であり，「一目惚れから相思相愛」の段階に入ったことの証拠であると見なしている[55]。

王映霞自身，上海から帰った後「彼から恋情あふれる手紙が届くたびに，私はすぐさま封を切って読み，読み終わると返信を書かずにはいられなかった。書いては投函し，投函しては後悔する，という波のような心情の揺れが，一日に何回あったことであろう」と，このころを境にして感情に変化が生じたことを認めている。

もうひとつ，注目すべき記述がある。

> 時に，以前読んだことのある彼の小説『沈淪』の中の孤独な「彼」が思い浮かんだ。その彼が，今私の眼前で揺れているようであった。「彼」は確かに同情するに値するものなのに，私はどうして恐れるのか？　私はどうして同情する勇気がないのか？　…中略…　今，この同情を与えるのは私しかいないようだ[56]。

ここでいう「同情」とは，憐憫，あわれみではなく，相手を理解する心，相手に寄り添う心，という意味に解すべき[57]であるが，王映霞は，すでに郁達夫の熱愛を拒絶できないほど，彼女の中で彼の存在は大きなものとなっていたようである。そして，その思いを決定づける上で，郁達夫の出世作『沈淪』が少なからぬ役割を果たしていたことは事実である。彼の作り上げた小説世界，読者の主人公に寄せる共感が，作者郁達夫への共感に結びついたと言えよう。

手紙と小説，結局王映霞の心を郁達夫へと導いたのは，彼の言語表現の魔力だったのではないだろうか。もちろん，それは計算されたものではなく，そのときの彼の真実の表現ではあったが，やはりそこに言葉と思想のプロである作家の真骨頂を見る思いがするのである。

５，婚約をめぐる顛末

さて，王映霞が郁達夫の求愛を受け入れる覚悟を固めたとき，その前に大きく立ちはだかったのが，郁達夫の妻の存在，つまり郁達夫が既婚者である，という現実であった。

妻子と恋人，この問題は，王映霞がまだその重大さに思い至っていないときから，郁達夫の中では，幸福な前途を阻む難題として，しばしば彼の心を苦しめていた。日記の記述に，その苦しい胸の内が吐露されている。

例えば，「僕は無意識のうちに，また北京にいる子どもと，目下まだ未解決の二人の女性のことを思っていた。ああ，人生の矛盾はまったくきびしいものだ。」（『村居日記』1927年１月30日）「出家遁世し，全く係累のいない，責任のない放浪者になりたいと思う。たとえ今度の王女史に対する恋愛が成功したとしても，今後の苦しみはなおいっそう募るばかりだろう。僕も彼女も二人とも運命に弄ばれた人間で，自由に行動できないからだ。」（『窮冬日記』２月５日）王映霞から愛の確証が得られたあとでも，「僕は映霞の肩を抱いて恋の至福の甘さを味わいながら，一方では産褥に喘いでいる北京の妻のことを思っている。ああ，人生の悲劇よ，たぶん僕はそれを一身に担っているのだ。」（『新生日記』３月26日）

遠い北京の不憫な妻を気遣いながら，王映霞への思いも断ち切れない。映霞の愛を得るには，孫荃との婚姻関係を解消しなければならないが，何の落ち度もない妻を離縁することは忍びない。孫荃と王映霞，良心の呵責と胸こがす恋情の間で，郁達夫は葛藤し，進退窮まっていた。

王映霞もまた，思い悩んだ。もし妻子ある男性と結婚したならば，「家族が私のために悲しみ，社会が私を断罪し，すべての親戚友人が私を嘲笑することを思った」と述べている。妻のある男性と結婚するということは，すなわち，法律的には妾となることを意味する。本稿（上）でも触れたとおり，俗に言う「両頭大」は，当時めずらしいことではなかったが，名家の娘にふさわしい選択ではなかった。『王映霞自伝』では，この問題に対して，王映霞が郁達夫にどのような要求をしたか，（郁達夫の日記によれば，たびたび将来について話し合ったようであるが）二人の間でどのような結論に達したかは，記されていない。しかし，彼女が，たとえ郁達夫の置かれている状況を理解し，孫荃の境遇に同情したとしても，孫荃との結婚解消を

前提としないで郁達夫と実質上の夫婦になることを承服したとは，考えにくい。

孫百剛は，郁達夫との交際を断念させようと王映霞を説得した時のやりとりを，次のように記している。

（孫百剛が，郁達夫の求愛を受け入れるつもりかどうか問いただしたのに対して：筆者）

「私はもちろん軽率に承諾したりはしませんわ。」映霞は小さな声で言った。

「あなたが言う軽率にはしないとは，彼に富陽の奥さんとの離婚を迫るということだね。しかし，男女の結婚というのは，決してそんな単純な形式の問題じゃないんだよ。…略…」

…中略…

「それじゃ，あなたはもう彼の才能に惚れ込んでしまったんだね。それほど立派な気持ちを持っているなら，いっそその立派さを徹底的に貫いて，無条件で彼といっしょになって，彼の今の家庭をこわさないでほしいのだが，あなたはできますか？」

「それは，絶対に私の家の同意を得られないと思います。」[58]

この会話から，少なくとも，王映霞が郁達夫に孫荃との離婚を求めるつもりであったこと，離婚という条件が整わない限り，王映霞側の家族の許可が得られないと考えていたことがわかる。

陳福亮[59]は，「もし郁孫二人の結婚を解消しなければ，王映霞は，社会的地位・倫理・友情のどの方面から考えても，絶対に達夫に嫁ぐことはできない，それが彼女の尊厳を守る唯一の道であった」と，王映霞の心境を描写している。近代女性としての自尊心，さらに時代や環境も，第二夫人という地位に甘んじることを決して許さなかったのである。それほど苦しく困難な道ならば，引き返すという選択もあったはずだが，そうしなかったのは，王映霞の中に，この恋愛に対する執着心，この恋愛の価値に賭けてみようという気持ちがあったからであろう。それは，すなわち郁達夫を信じようという決断であった。

では，彼らはこの問題をどのように切り抜けて，婚約，結婚にこぎつけたのか。まず，最大の難関と予想された王映霞の母親と母方の祖父王二南の反応から見ていく。

王映霞は，母と祖父王二南の同意を得るために，４月３日帰省する。予想していた通り，映霞から郁達夫のことを打ち明けられた母は，猛反対した。その理由は，妻子ある男性との交際は，由緒ある家の対面を傷つける，定収入がなく将来苦労するだろう，の二点であった。

母の説得に窮した王映霞は，郁達夫に手紙で母の考えを伝えた。『達夫書簡―致王映霞』[60]によると，郁達夫は，王映霞が杭州に帰った４月３日から自身が杭州に出向く４月13日までの間に，全部で８通の手紙を王映霞に出しているが，その中の４通目，４月６日午後11時付の手紙は，王映霞の手紙を受け，母の不安を取り除くために書かれたものである。離婚の問題に対する彼の回答は次のようなものであった。

僕の北京の妻については，二人のことに干渉させず，僕たちの結婚を認めさせることは，必ずできるでしょう。心配なのは，君の母上が僕に正式に離婚しろということです。それは実際上少々面倒で，もうひと手続いるでしょう。映霞，僕は，君の母上が本当に君を愛しているなら，きっといつまでも許してくれないということはないと思います。

映霞，僕たち二人は心はもう結ばれています。僕は形式的なことはどうでもいい，ただ一日も早く君といっしょに暮らして，安定を得たいと願っているのです[61]。

この文面からは，郁達夫が婚約や結婚といった形式にはこだわらず，ただ実質的な同居生活の早い実現を熱望していることが読み取れる。もっとも，この形式こそが郁達夫のアキレス腱であって，できればそこに触れたくない，という潜在意識も働いていよう。ここに触れると，必然的に孫荃との離婚が避けて通れないものとして浮上してくるからである。しかし，離婚は，孫荃本人が同意しないことはもちろん，母親や兄たちからも激しい非難を受けることは必至であった。遠回しに，しかし明らかに，正式の離婚は困難だと言っている。離婚しないまま王映霞と夫婦になりたいと言っているのであり，いずれ必ず孫荃と離婚するとは，明言していない。

この時点で可能なこととして，孫荃に自分と王映霞との結婚を承認させ，騒ぎ立てさせないことは約束している。王映霞にしてみれば，正夫人の納得の下で平穏裏に晴れて第二夫人となる（これさえも耐え難い屈辱ではあるが）ならまだしも，正夫人が悶着を起こしたりすれば体面に一層傷がつくであろう。郁達夫としても，いかに都会に離れて暮らす身とはいえ，正妻の承認をとりつけず，一族を無視した形でこっそり別の家庭を作ることはできなかったのであろう。ここに，郁達夫と孫荃の絆と，正夫人をないがしろにできないという当時の家族関係のありようを見ることができる。

郁達夫が孫荃の説得に自信を持っていた理由を，許鳳才は次のように推論している。

郁達夫と王映霞の恋愛は，上海の友人の間では

すでに噂のまとになっていたが，彼の家族，とりわけ夫人の孫荃はまだ全く知らなかった。

しかし，孫荃の性格と人柄からすれば，彼女はたとえ知ったとしても，きっと黙認するだろう。離婚さえしなければ，彼女たち母子の生活は保障されるのだから，彼女は自分を曲げてでも丸く収まるように，犠牲となるであろう。加えて，このようなことは，当時の上層知識人社会では珍しいことではなかった[62]。

上に引用した４月６日付の手紙の中に，もう一箇所「私は必ず年内にこの大問題を解決したいと思っています」という件がある。許鳳才の解釈に従えば，「上述のような要因に基づいているからこそ，郁達夫は年内に孫荃のことを解決する自信があった」のであった。つまり，「年内に解決する孫荃のこと」とは，孫荃に王映霞との結婚を承認させる，ということを指すことになる。とすると，やはりこの手紙においては，離婚の実行・可能性について何ら回答を与えていないと見てよいだろう。

郁達夫の求愛中の王映霞宛書簡を見ていくと，この手紙以外にも，孫荃のことに言及した記述が少なからずある。その中で，郁達夫が，彼の日記を読んで激怒した王映霞に出した弁明の手紙の中に，次のような一節がある。

僕の決心（妻と離婚するということ：筆者）については，今はしばらくどうしても決意できません。しばらくはどうしても実行できません。彼女が出産を控えているからです。しかし，将来僕は必ず離婚できるでしょう。（にもかかわらず）そのうえ，離婚するまでは，僕のことを相手にしないなんて，どうしてそこまで腹を立てる必要があるのでしょうか。（３月11日夜）[63]

さらに，その２日後の手紙では，「あのこと（孫荃と離婚すること：筆者）は，もし解決できなければ，僕は３年後にきっと死んで見せましょう」（３月24日朝）とまで言っている。王映霞の怒りを解き，離れかけている心をつなぎとめたい一心から出た便宜的な言葉だったのであろうか。少なくとも，これらの将来を語った言葉に比べると，王映霞の母の不安に答えた４月６日の手紙の内容は，ややトーンダウン，よく言えば現実的なものとなったと言えるかもしれない。

いずれにせよ，王映霞に対する郁達夫の誠実で熱心な手紙による説明が功を奏したのか，母の気持ちも幾分軟化して，４月13日に郁達夫が直接話をするため王映霞の家を訪ねたときには，達夫が拍子抜けするほど和やかな態度で迎え入れてくれた。もっとも王映霞は，「母はとても善良な人だったので，心では二人の交際に反対していても，郁達夫が来ると，やはり彼を客人として礼を尽くして応対した」と述べている。

それでは，祖父王二南はどうだったのか。王映霞によれば，「外祖父自身が読書人だったので，郁達夫と詩文を論じ，酒を酌み交わしながらおしゃべりし，すっかり意気投合した。」二人は，世代の差こそあるものの，文学・学問の話ができる同じ知識人同士として，気心が通じたのであろう。郁達夫にとって，王二南は心から尊敬できる大先輩であったが，王二南にとっても，郁達夫はすでに時代を代表する文化人，知識人であり，孫娘を託するに足る人物だと見なしたのであろう。

郁達夫は杭州に１週間滞在した後，４月20日に上海に帰っている。上海に到着した翌日21日の手紙に，「今回の杭州行きで，僕たちのことはどうやら半ば片が付いたようです。あとは，僕の方の問題です。どうか安心して下さい。僕は絶対に死ぬまで心変わりしません。最初の計画通りにやります」と書いていることから推察すると，王映霞の母と祖父は，このときに郁達夫と王映霞の結婚を基本的に認めたものと思われる。

その後，郁達夫は過労がもとで肝炎を患い，療養のため，５月28日，再び杭州に行く。これには，当局の追求を逃れるため身を隠す目的もあった。

王二南は，病状の深刻な郁達夫のために，医術に通じた和尚の来診を請うなど，家族ぐるみで親身の世話をし，王映霞は「この接近によって，理解は以前にも増して深まり，同情の気持ちも強くなった。」

王家にとって，二人の結婚を認める一つの区切りが，６月５日の婚約披露宴であった。郁達夫が既婚者であり，形式にこだわっていなかったことからすれば，婚約披露宴の挙行は，王映霞とその家族の意向をくんだものであったと考えられる。名家の娘である王映霞としては，対社会的にも，人生における重要な儀式であったに違いない。杭州聚豊園で行われた婚約披露宴には，王映霞側は親戚友人など大勢が参列したが，郁達夫の側は，次兄の郁養吾一人であった。そのいきさつについては，次章の郁家の家族の反応の中で，改めて述べることとする。

ともかく，王家の承認はこれで決定したわけであるが，結局，母と祖父王二南は，結婚の条件として，郁達夫に妻孫荃との法律上の離婚を求めたのであろうか。少なくとも，郁達夫が残した文章，日記，手紙類には，明記はされていない。（仮に求められたとしても，それを書き残しておくことは不都合であったかもしれない。）

『風雨茅廬―郁達夫大伝』（下）は，王二南は郁達夫に対してはっきりと，王映霞のために，道理にかなったやり方で妻子の身の振り方を決めることを要求し，達夫もそのことを一も二もなく承諾した，としている。同書は，また，婚約披露宴の前，６月１日に，次兄郁

養吾が初めて王二南と面会したとき，王二南が，郁家の年長者たる次兄に対して，達夫と孫荃の離婚を望んでいることを告げた，とも述べている。

王二南の郁達夫への要求に関連して，郁達夫の文章に気になる記述がある。

> 先生は，お会いするなり，懇ろに体を大切にするようにと勧めてくれ，私と映霞の結婚にも，異議を唱えなかった。ただ，財産分与のあと，それを前妻に譲れば，彼ら母子の生活に足りるかと問うた。[64]

これは，王二南の没後の1935年に書いた「王二南先生伝」の一節で，この場面は，郁達夫が病気療養のため２度目に杭州に行ったときのことを描いているものと思われる。ここで，郁達夫が，王二南が発言したと書いている財産分与の妻への移譲は，離婚後の経済保障，生活費や養育費を意味すると考えるのが自然であろう。現代風に言えば，離婚時の慰謝料と養育費である。（ただし，後述するが，実際には，郁達夫は孫荃との婚姻関係を解消しないまま，毎月50元を生活費として送金しており，そのことは王映霞も『王映霞自伝』で証言している。）

上述のいくつかの資料を総合すると，婚約披露宴の前に，郁達夫と王映霞の家族との間に，概略次のような約束が交わされていたと推測することができる。

郁達夫と王映霞が結婚を前提として交際することは認める。ただし，王映霞を妾とするわけにはいかないので，結婚は，達夫が正式に孫荃と離婚してからとする。

郁達夫としては，最終決着を先送りにした形で，ひとまず恋愛の成功を勝ち取ったということであろう。そうだとすれば,婚約披露宴の日，６月５日の日記に,「映霞とのことは，今夜で決まった。あとは，荃君（孫荃のこと：筆者）をどう処置するかという問題だ」と書いているのは，もはや孫荃に納得させる，といった生易しい問題ではなく，離婚という困難な問題に立ち向かおうとする決意を表していると解釈すべきであろう。

６，郁家の人々

それでは，この郁達夫と王映霞の結婚を，郁達夫の家族はどのように考えていたのであろうか。当時，妻の孫荃は，北京で２人の子どもを育てながら夫の帰りを待っていた。母親の陸氏は故郷の富陽に，長兄の曼陀は北京で裁判官をしていた。次兄の養吾は，この年の秋に故郷富陽で診療所を開業しているので，おそらくその準備で富陽と北京等を往復する日々を送っていたのであろう。

孫荃が，いつ，どのようにしてこの事実を知ったのかは，正確にはわからないが，郁達夫の日記の記述から判断すると，７月29日に受け取った孫荃からの手紙は，明らかに王映霞との婚約を非難する抗議の手紙であった。それも，かなり激しい口調のものであったと想像される。そのことは，翌30日の日記の「人力車に乗って帰る道すがら，すこぶる人生の不安を感じた。原因は北京の荃君から来た脅迫の手紙にあるようだ」からも裏付けられる。「脅迫の手紙」と言う以上，離婚するなら自殺する，といったような言葉が書かれていたのかもしれない。この時代に，夫から離縁された女性が受ける不名誉と現実の生活上の苦難は，想像に難くない。まして，夫に対して献身的につとめ，跡継ぎも生んで嫁の責任を十分に果たしている孫荃としてみれば，新しい愛人のために離婚させられるなど，絶対に容認できることではなかったであろう。

ここで，郁達夫の母の反応を見ておきたい。

郁達夫が直接母に会って，王映霞との結婚の許しを求めたのは，婚約披露宴の前日，６月４日のことであった。日記にはこのように記されている。

> 松筠別墅[65]に行き，年老いた母に会うと，胸が詰まって泣き声も言葉も出なくなった。もう２年近く会わないうちに，母はすっかり老けてしまった。僕は彼女と気が合わず，きょうまで恨んできたが，今回の突然の帰郷は，ただ跪いて彼女の許しを得たいと思うのみだった[66]。

この日，慌てて帰郷したのは，前日，次兄から婚約披露宴に出られないかもしれないと知らせてきたので，次兄の参列を改めて要請するためであった。次兄が婚約披露宴への出席をためらったのは，母が達夫と王映霞の婚約を聞いて激怒したからであった。

このとき，二人の間でどのような会話が交わされたかはわからないが，『風雨茅廬―郁達夫大伝』（下）に示唆に富む記述がある。

> 母親は達夫を厳しく叱責すると，最後にこう言った。「蘭坡（孫荃の字：筆者）は私の嫁だ，私にはあの子を追い出すなんてことはできないよ。もしも，あの子との生活がだめだというのなら，おまえが北京から連れ帰っておいで。私があの子をちゃんとしよう。あの子を実の娘として扱って,先祖の財産をあの子たちに分け与えよう。おまえは早くあの子を連れ戻しておいで。」[67]

かつて嫁姑の間には確執があり，孫荃が北京で暮らしているのも，姑との同居がうまくいかなかったからであったが，それでも郁達夫の母にとって，孫荃は自分が認めて迎えた嫁であり，跡継ぎの男の子も生んでいた。自らが寡婦として辛酸をなめてきた母親には，

孫荃の運命を思うと，郁達夫の行為は許し難いものであったのであろう。母親は，断固として，息子を非難し，嫁の孫荃を守る立場に立った。離婚されたら実家に戻る以外に行き場のないであろう孫荃を，婚家である自分の家に迎え入れ，最後まで面倒を見ようという覚悟である。

郁達夫の日記には，婚約披露宴以後，何度か北京へ行く計画が記されているが，７月31日に「２週間後に北京へ行くことに決めた。一つには，家のことを片付けて，安心して外国へ行き永住するためだ」と書いている。刊行された『日記九種』は，この日で終わっており，予定通りに北京に行ったかどうかを確認することはできない。

『風雨茅廬―郁達夫大伝』（下）では，郁達夫は９月下旬に北京へ行き，借りていた家を引き払い，お腹の大きな妻と子どもを連れて上海まで戻り，そこから同郷人に託して富陽に連れ帰ってもらった，としている。そして，孫荃を迎えた母は，家を孫荃のために空け，達夫名義の田畑を分け与えた。そのうえ，ときに手紙で，期限通りに生活費を送ってあげるよう，達夫に注意を促したりもした，と述べている。

因みに，『増補日記（之一）』[68]10月４日の項に，「汪某に頼んで富陽に100元を届けてもらう。荃君の２か月分の生活費だ。荃君に手紙を書く」とある。これが，日記に記された最初の送金であり，このことから，少なくとも10月４日以前に孫荃母子は富陽の郁家に戻っていたこと，毎月50元の送金が，郁達夫の王映霞との婚約に起因する孫荃との家庭生活の解消に対する代償であったことは間違いない。

このように見てくると，孫荃母子を故郷富陽の家，母の元に連れ戻した時点で，郁達夫は孫荃との別居という形をとることを選択したと考えてよいであろう。これは，離婚の成立を目指していた郁達夫にとっては，半ば妥協した形での解決であったと思われる。このような処置をとらざるを得なかったのは，第一に，孫荃の頑強な抵抗，第二に，郁達夫自身の孫荃に対する憐憫の情と，過失のない妻に離婚を迫ることの理不尽さを十分に認識していたから，第三に，家長である母の意向に逆らうことは，孝の精神からいってもできなかったからであろう。

しかし，この処置は，王映霞にとっては，郁達夫の苦悩も孫荃の悲しみも理解できるとはいえ，やはり不本意であり，将来に禍根を残すものとなったのである。

孫荃の嫁（次男郁天民の妻）陸費澄は，別居後も郁達夫が孫荃母子に心遣いを忘れなかったことを，次のように記している。

> 孫荃や３人の子どもたちと別れて，別の人と共同生活をするようになった後も，郁達夫は毎月孫荃に手紙と生活費を送り，親戚友人や同郷人にことづけて，妻子の必要なもの，例えば粉ミルクや毛糸，スカーフ，布地などを届けて，夫として，父としての責任を果たした。抗戦時期，郁達夫が福建で奉職していたときでも，福建郵電局に勤めていた孫荃の弟の嫁徐天真の兄にことづけて，金品を届けてくれた[69]。

ここで，時期は前後するが，郁達夫の長兄郁曼陀と次兄郁養吾の反応を見ておきたい。

郁達夫は，７月15日の日記に，「きょうはまた，北京の曼陀兄から手紙が来た。僕と映霞のことを痛罵している。腹が立ってしかたがない」と記している。すでに本稿（上）で述べたように，長兄は幼くして父を失った達夫にとって父のような存在であり，その兄からの激しい非難，叱責は相当こたえたに違いない。しかも，妻の孫荃は，北京に移り住んで以来その長兄一家の近くに暮らしており，ほとんど家を空けている達夫に代わって，長兄夫婦が何かと孫荃母子の力になっていた。長兄が孫荃に同情し，郁達夫の行為をなじるのは当然であろう。

郁曼陀の娘郁風が，母親から聞いた話として，「父は北京でそのことを知ると大変怒って，何度も手紙で三叔（三番目のおじさんの意味：筆者）に忠告し，裁判官としての父はまず，これが重婚罪にあたると指摘したが，既成事実は結局既成事実であった」[70]と記している。さらに于聴「説郁達夫的『自伝』」では，「達夫に正式の結婚式を行わないことを約束させて，ひとまず和解した」と書かれている。他の資料では，ここまで具体的な言及は見られないが，そのようなやり取りもあったかもしれない。

郁風は，王映霞との結婚に大反対した父のその後のエピソードも記している。それによれば，転任により北京から家族より一足先に上海に転居した曼陀は，退勤後しばしば郁達夫の家（王映霞と築いた家庭）で食事やおしゃべりを楽しんだ。その頃交流のあった達夫の友人の一人が田漢であった。後の抗日戦争期に，郁風が田漢に，重婚罪を犯したことに怒っていた父が，どうして上海で仲直りしたのかとたずねると，フランス租界では重婚罪は告訴されなければ罪に問われないこと，曼陀が，王映霞の作った魚料理が大好きだったことを話してくれた。

結局，長兄郁曼陀も，郁達夫の真っ当な家庭生活の実態を目の当たりにして，事実上認めざるを得なかったのであろう。

当初強硬に反対した長兄に比べて，次兄の郁養吾は，郁達夫の心情にも幾分理解を示した。元々，達夫は厳格な長兄より，年齢も近い次兄と仲が良かったうえ，次兄自身が，その頃第二夫人と結婚したばかりであったからである。郁達夫の５月４日の日記に「夕食後出版部に帰って，北京の次兄が来たことを知る。すぐに

旅館に訪ねて行き，甥姪と次兄が新しく娶った第二夫人に会う」とある。婚約披露宴に郁家から出席したのが，郁養吾唯一人だったのは，そのような事情からであった。

後の日中戦争勃発後のことであるが,次兄郁養吾は,郁達夫不在の中で，戦禍を逃れて富陽に避難してきた王映霞たちの面倒を何くれとなく見ている。

王映霞もまた，次兄の，婚約披露宴以来の好意的な対応に感謝していた。

（待続）

注

49　上海北新書局，1927年初版。「労生日記」(1926年11月３日―11月30日)，「病閑日記」(1926年12月１日―12月14日)，「村居日記」(1927年１月１日―1927年１月31日)，「窮冬日記」(1927年２月１日―２月16日)，「新生日記」(1927年２月17日―４月２日)，「閑情日記」(1927年４月２日―４月30日)，「五月日記」(1927年５月１日―５月31日)，「客杭日記」(1927年６月１日―６月24日)，「厭炎日記」(1927年６月25日―７月31日)。

本稿では，丁言昭編『郁達夫日記』(山西教育出版社，1998年）所収の『日記九種』に拠っている。

50　これらの文献については，本稿（上）(『愛知教育大学研究報告』第55輯〈人文・社会科学編〉2006年３月）の注４，参照。

51　香港宏業書局，1965年再版本に拠る。

52　本稿（上）注３所掲書。

53　王映霞は，1906年に，杭州でも名高い商家の長女金宝琴として生まれた。王二南は，その母王守如の父親であり，王映霞にとっては外祖父にあたる。王映霞が小学校を卒業する頃，跡継ぎの絶えた外祖父の希望により，王家の孫娘となり，姓を王と改め，王映霞と名乗ることになった。

王二南は，咸豊３年（1853年）に読書人の家に生まれ，21歳で科挙に応じたが，両親を失い，家は困窮した。その後，浙江按察使孫稼生の知遇を得て入幕し，書院の山長や大学教授の職に就いている。旧時代の伝統的教養を身につけた読書人であり，郁達夫より43歳年長であった。

54　丁言昭編『王映霞自伝』(江蘇文芸出版社，1996年)，33頁。以下，王映霞の発言は，原則として同書に拠っている。

55　『郁達夫的婚姻和愛情』(紅旗出版社，2005年)，326～327頁。

56　注54所掲書，54頁。

57　王映霞もここに引いているように，『沈淪』の中に，「僕は知識もいらない，名誉もいらない，ただ僕を慰め優しくしてくれる心がほしいだけだ。白熱の心，その心から出た同情…」という一節があり，王映霞の言う「同情」もこれを受けている。

58　『郁達夫与王映霞』31～32頁。

59　『風雨茅廬―郁達夫大伝』(上・下)(中国広播電視出版社，2004年)

60　王観泉編『達夫書簡―致王映霞』(天津人民出版社，1982年)。以下，郁達夫の手紙は，原則として同書に拠る。

61　同上書，60～61頁。

62　注55所掲書，354～355頁。

63　注60所掲書，41頁。

64　「王二南先生伝」『越風』半月刊第３，４期。
ここでは，『郁達夫文集』第４巻（生活・読書・新知三聯書店香港分店，花城出版社，1982年）所収，62頁に拠る。

65　長兄郁曼陀が，定年後に故郷で隠棲するために，鶴山の麓に建てた別荘。このころには，母陸氏は，富陽城内の郁達夫の生家ではなく，この「松筠別墅」に住んでいたらしい。

66　注49所掲書，135頁。

67　728頁。

68　『東海』文学月刊1979年１月号。ここでは，注49所掲書，170頁に拠っている。

69　「孫荃心目中的郁達夫」(蔣増福編『衆説郁達夫』浙江文芸出版社，1996年所収）382～383頁。

70　「一個真正的文人―三叔達夫」(『我的故郷』百花文芸出版社，1984年所収）158頁。

（平成18年９月19日受理）